

宍戸昌夫先生を悼む

長谷部 碩 (三〇年卒)



故 宍戸昌夫先生

(公衆衛生学名誉教授)
(平成27年11月26日 逝去)

春未だ浅き

二〇一五年の暮れのある会合で、北海道出身の医師から宍戸名誉教授が十一月に逝去されたとの悲報を伝えられた。私たち三〇年卒業生は、昭和二十七年、当時は助教であった宍戸先生から、一年間公衆衛生学の講義を受講した。

当時の日本人の死亡順位の第一位は結核であった。乳児死亡率も高かったが、昭和十八年に交付された妊産婦手帳(現在の母子手帳)の成果が少しずつ現れ始めていた。座学のほか施設見学も行われた。東京都港区にある公衆衛生に従事する人材育成機関の国立公衆衛生院、横浜市保土ヶ谷にある日本初の近代的浄水施設の西谷浄水場、法務施設の集団給食施設、入浴施設、その他、新子安にあった某自動車工場などであった。これらの施設見学から得られた公衆衛生学の知識は、後年、産業医に従事する際に大いに役立った。

昭和も終わりに近くなったある日、同

僚の医師と一緒に公務で出張した帰り、三軒茶屋の都バス停留所でバスを待っていたところ、偶然宍戸教授がいらっしやうった。後日その医師から宍戸先生は北海道帝国大学予科の昭和十二年記念祭歌「春未だ浅き」を作曲されたこと、クリスチャンであることなどを伺った。「倶進会たより」の第一四一号十七頁ではその他に予科寮歌二曲を作曲されたことをご自身で述べておられる。先生は寮歌愛好家で作曲者でもあった。旧制高校の寮歌は凡そ二千数百曲あり、その九九%は高校生自らが作詞作曲したのと言われている。現在寮歌を日本の文化遺産として登録しようという動きもみられるし、滋賀県では、第三高等学校の「琵琶湖就航の歌」を県歌にしようという声まで出ている。

バス停留所でお会いしてから数年して、



名誉教授(中央)と桔梗先生(右)と筆者(左)

バス停留所でお会いしてから数年して、その筈、司会をなさっているのは宍戸先生であった。たまたま会場にいらした三十二年卒業の桔梗先生とともにご挨拶に伺ったのは言うまでもない。その後はほぼ毎年、横浜寮歌祭に参加して、宍戸先生、桔梗先生と寮歌を歌ったり、ご教示を頂いたり、横浜市大時代の思い出話



第44回横浜寮歌祭第2部で「春未だ浅き」を高唱される宍戸名誉教授(筆者撮影)

に花を咲かせたりして楽しい時間を過ごしたのであった。横浜寮歌祭で、北大予科修了生は第一部では、かの有名な「都ぞ弥生」を、第二部では、宍戸先生作曲の「春未だ浅き」を合唱するのが恒例であった。会場はその後、新横浜プリンスホテル次いでパシフィコ横浜アネックスホールへと移ったが、残念ながら平成二十二年第四十四回をもって閉会となった。先生のご長男は私の出身中学の後身の新制高校の卒業生で、現在は同校の同窓会会長をされている。先生はこの数年北海道大学での寮歌の会には、ご長男を同行されて毎年参加されていたとのことであつた。末筆ながら、宍戸先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

春未だ浅き

昭和十二年
第三十回記念祭寮歌

平城 鷹雄 作曲
宍戸 昌夫 作詞

一

春未だ浅き白楊の
雪解の小路たまためば
しばし聞けとて私語の
木の間もれくる夕嵐

二

あはく足げに咲き出でし
おぼろおぼろの水芭蕉
なつかしの原始杜肩とりて
椿火をめぐり歌はなん

三

長髪頬に戯むれて
昔変らぬ風なれや
今したたへん三十回の
青史をかざす記念祭

四

美酒の夜は更け行けど
尽きぬ男子の黒潮を
契の杯に汲み交はし
常緑を祝ふ自治の宴